



## 追悼 作曲家・多田武彦先生

愛称「タダタケ」こと多田武彦先生が逝かれました

新月会会長 小池義郎

2017年12月12日、作曲家多田武彦氏が逝去されました。多田武彦氏は京都大学法学部を卒業後、富士銀行(現みずほ銀行)に入行、銀行勤務の傍ら日曜作曲家として、主に男声合唱曲分野において多くの作品を発表されました。

多田武彦氏には三人の弟さんがおられ、大阪大学、同志社大学、関西学院大学で学ばれ、それぞれ男声合唱団、グリークラブに所属して合唱活動をされていました。そんな経緯もあり同志社グリークラブ 委嘱により「雪と花火」がつけられ、関西学院グリークラブでは1959(昭和34)年の第27回リサイタルのために作曲をお願いして「中勘助の詩から」が生まれ、翌年は「雪明りの路」、更にその翌年続いて「航海詩集」とそれぞれ初演がなされました。「中勘助の詩から」の初演に際して、プログラムに次のようなメッセージを寄せておられます。

『たしか昭和24年の5月でしたか、大阪の北野劇場で関西学院グリークラブ創立50周年の記念演奏会で、シューベルトの「Die Nacht」の演奏を聴き、初めて男声合唱のハーモニーの美しさを知りました。爾来私は今日に至るまで関学グリーのファンであり、それも口ではいろいろと批判しながらも、心の中ではあの「トンネルの中の響のようなハーモニー」に郷愁を持ち続けています。こうした郷愁と並行して、私が京都大学男声合唱団の指揮者であった頃から、関学グリーの演奏上の長所について探求し続けて来ました。(中略)「中勘助の詩から」は、関学グリーの今後の一段の発展を願うべく、今迄私が探究してきた“関学グリーの演奏上の短所”を補うための「エチュード」として書いてみました。(後略)』。

多田武彦氏の作品の多くはア・カペラの男声合唱曲ですが、それらは、いつも関西学院グリークラブの「音色」を頭においておられたのではと、手前勝手に想像するところです。関西学院グリークラブでは、このほかに「白き花鳥図」、「中原中也の詩から」、「尾崎喜八の詩から」を初演しています。2010年の第63回全日本合唱コンクールで、自由曲として「尾崎喜八の詩から」より「冬野」と「かけす」を演奏(指揮、広瀬康夫)して最優秀金賞を受賞しましたが、この時はことのほか喜んで下さいました。

今日のステージで演奏される「柳河風俗詩」は、1954(昭和29)年に発表された北原白秋の詩による処女作ですが、当時としては数少ない男声合唱のレパートリーとして多くの合唱団で取り上げられました。1965(昭和40)年、第1回世界大学合唱祭がNew Yorkで開催され、関西学院グリークラブはアジア代表として招かれました。1か月にわたり各地で演奏会をもちましたが、私はこの演奏旅行に「柳河風俗詩」を選曲し指揮を致しました。ボストンシンフォニーホールでの7大学交歓演奏会でこの組曲を演奏した際、手厳しい批評で有名なロバート・テラー氏に「関学は作り声がなく、リズム感も良い。試みに順位をつけるならば、1位関学、2位ハーバード、3位チリ…、オックスフォードは5位」と紙上で評され、帰国後多田武彦氏にこの旨ご報告すると大変喜んで下さったのが昔日の思い出です。

1967(昭和42)年に作曲された男声合唱組曲「雨」に関して、多田武彦氏は「私は今後いつでも作曲の筆を折っていいと思ったし、とりわけ終曲「雨」は、私の臨終における鎮魂曲として、私の心の奥深く刻みこまれてしまった。」と述べておられます。(雨のおとが きこえる 雨がふっていたのだ。 あのおとのように そっと世のために はたらいていよう。 雨があがるように しずかに死んでゆこう。)

関西学院グリークラブをこよなく愛された多田武彦先生。天上での平安をお祈りしつつ！